

〔東海道名所記<sup>六</sup>〕これ傾城町なり、世に島原<sup>京</sup>と名づく、<sup>略</sup>中かふろは文をもちて、あげ屋町をさしてゆく、たれ様の御かたへつかはさるゝやらんと見るも浦山し。

〔用捨箱<sup>中</sup>〕禿の菖蒲打

端午の日の印地打一變して、いんじゆ切となり、正保慶安頃は、此日專童のいどみあらそひし事、昔々物語にくはし、又其いんじゆ切止て菖蒲打となれり、中古風俗志<sup>明和元年略</sup>に、<sup>略</sup>中今は絶てなしといふ事あり、さて此菖蒲うち絶たる後も、吉原の禿にのみ残り、彼節句の日、江戸町方京町方と立別れ待合の街に出て打合を見物群集したりしが、あやまちて疵をかうぶりし禿もありしより、遂に止たりといふ事、平道<sup>場屋町</sup>没して、今もとむるに便なし、<sup>佛人</sup>が彼地の事を集し雜記にありしが、子<sup>柳亭</sup>種彦寫しとめざるさきに平道没して、今もとむるに便なし。

〔落標〕禿由緒

當津<sup>阪</sup>大の禿は都島原のとは少しの譯ちがひあり、往昔平相國清盛六波羅に在住のとき、拵へたまふ三百人禿の餘風にて、いにしへは禿ども甚權式高かりしに、今は昔などの威勢はなけれども、其餘風故揚屋茶屋より呼むかへに來る呼立女に、ヲウヲウと答る也、これ古代の權の残りし所也といひつとふ、すべて何國とても新艘の女郎は、此内より段々太夫職までにす、むもの也、新艘出る時の嘉例は、廓に格式ありていはふ事也。

遊女數

〔嬉遊笑覽<sup>九</sup>〕後世繁華おとろへたりといへども、享保五年の丸鑑に、散茶女郎ばかり二千人に

近しとあれば、其他準へて知るべし、天明六年遊女禿すべて二千二百七十餘人、享和の初、三千三

百十七人文政八年、三千六百人、<sup>此時男藝者二十人、女げい</sup>

諸藝太平記<sup>元祿四年</sup>、女郎の總數は京大阪を一ツにからげても、中々行とゞくことにあらず、太夫

はやうく、四人、格子八十六人、散茶五百一人、うめ茶<sup>或ひハクミ</sup>二百八十人、五寸四百卅人、三寸